

# 松山が銅メダルプレーオフで敗れ 惜しくもメダルを逃す。星野は38位タイ

開催日 2021年7月29日(木)～8月1日(日)  
開催コース 霞ヶ関カンツリー倶楽部東コース(7,447ヤード、パー71)



1 最終組でラウンドする松山英樹(左)とザンダー・シャウフェレ(右)  
2 力強いショットを放つ松山  
3 38位Tで終えた星野陸也  
4 最終組の3選手。左からシャウフェレ、松山、ポール・ケーシー  
5 コースの攻め方を確認する星野  
6 プレーオフに惜しくも敗れた松山  
7 表彰台に立つ金のシャウフェレ(中央)、銀のロリー・サバティニ(右)、銅のC・T・パン(左)  
8 ボランティアやスタッフが丸となり大会を支えた

35の国と地域から60選手が参加して72ホール・ストロークプレーが行われた。

松山英樹は第1ラウンドを2アンダーパー、69で首位から6打差の20位タイ発進。星野陸也はパープレーの71で41位タイにつけた。第2ラウンドは悪天候による中断があり16選手がプレーを終了できなかった。松山は16ホールで6バーディを奪い、通算10アンダーパーで暫定3位タイに浮上。68でホールアウトした星野は通算3アンダーパーで暫定25位タイとなった。

第2ラウンド残り第3ラウンドが行われた3日目、松山は20ホールを6バーディ、1ボギーで回り通算13アンダーパーに伸ばした。首位のザンダー・シャウフェレ(アメリカ)とはわずか1打差の単独2位。金メダル獲得が現実味を帯びてきた。星野は73と苦戦し、46位タイに後退した。

最終ラウンド、序盤は足踏みして差を広げられた松山だったが中盤から巻き返し、14番で首位との差をスタート時と同じ1打差にまで戻した。だが、終盤はチャンスでパッティングを決めきれず通算15アンダーパーの3位タイでホールアウト。7人による銅メダルプレーオフは1ホール目で脱落して4位タイに終わった。金メダルは通算18アンダーパーのシャウフェレ、銀メダルは61と猛追したロリー・サバティニ(スロバキア)が獲得した。銅メダルプレーオフを勝ち抜いたのはC・T・パン(チャイニーズ・タイペイ)。星野は66で回り、38位タイで競技を終えた。

男子成績

順位	SCORE	選手名	1R	2R	3R	4R	合計
①	-18	Xander Schauffele	68	63	68	67	266
②	-17	Rory Sabbatini	69	67	70	61	267
③	-15	C.T. Pan	74	66	66	63	269
4T	-15	松山 英樹	69	64	67	69	269
38T	-6	星野 陸也	71	68	73	66	278

# 日本ゴルフ界史上初の快挙! 稲見が銀メダル獲得。畑岡は9位タイ



開催日 2021年8月4日(水)~7日(土)  
開催コース 霞ヶ関カントリー倶楽部東コース(6,648ヤード、パー71)

1



5



6



9

- 1 表彰台に並ぶ金のネリー・コルダ(中央)、銀の稲見萌寧(左)、銅のリディア・コ(右)
- 2 最終日12番からの4連続バーディで2位に浮上した稲見
- 3 最終組のリディア・コとアディティ・アショク
- 4 稲見は正確なティーショットでフェアウェイキープ率1位となった
- 5 世界ランク1位のコルダが金メダルを獲得
- 6 銀メダルを懸けたコと稲見のプレーオフ
- 7 9位Tでフィニッシュした畑岡奈紗
- 8 慎重にグリーンラインをよむ畑岡
- 9 10番ホール。池越えのパー3

男子同様、35の国と地域から60選手が参加して72ホール・ストロークプレーが行われた。

日本代表の畑岡奈紗と稲見萌寧は第1ラウンド、ともに1アンダーパー、71で回り首位から4打差の16位タイ発進となった。第2ラウンドは稲見が6番(パー4)でイーグルを奪うなど65をマーク。通算7アンダーパーの6位タイに浮上した。畑岡は68で回り、通算4アンダーパーの11位タイ。ネリー・コルダ(アメリカ)が通算13アンダーパーとして4打差の首位に立った。第3ラウンド、稲見が順調にバーディを重ねて通算10アンダーパーの3位タイでホールアウト。首位のコルダとは5打差ながら金メダルも狙える位置につけた。畑岡も通算8アンダーパーの7位タイに浮上し、メダルのチャンスが出てきた。

最終ラウンド、最終組の1組前でプレーした稲見は前半を4バーディ、2ボギーで折り返す。後半に入ると12番から4連続バーディ。一気に金メダル争いに加わってきた。雷雲接近で競技は一時中断。再開直後の17番で約4mのバーディパットを沈めてついに首位コルダに並んだ。しかし18番は2打目をバンカーに入れてボギー。最終組のコルダが18番でパーセーブして金メダルを確定させ、稲見は通算17アンダーパーの2位タイで並んだリディア・コ(ニュージーランド)とのプレーオフへ突入する。そして1ホール目でコを下して銀メダルを獲得。日本ゴルフ界で初めてオリンピックの表彰台に上った。畑岡はフィリピン代表で出場した笹生優花らと並ぶ9位タイに終わった。



2



TOKYO 2020

JAPAN

4



TOKYO 2020

7



3



8

## 女子成績

順位	SCORE	選手名	1R	2R	3R	4R	合計
①	-17	Nelly Korda	67	62	69	69	267
②	-16	稲見 萌寧	70	65	68	65	268
③	-16	Lydia Ko	70	67	66	65	268
4	-15	Aditi Ashok	67	66	68	68	269
5T	-13	Hannah Green	71	65	67	68	271
5T	-13	Emily Kristine Pedersen	70	63	70	68	271
:							
9T	-10	畑岡 奈紗	70	68	67	69	274
9T	-10	笹生 優花	74	68	67	65	274

東京2020オリンピックゴルフ競技における

# JGAのサポート体制

万全の感染対策と周到な準備が日本代表選手のパフォーマンスを引き出した



写真提供：IGF

開幕前に霞ヶ関カンツリー倶楽部で練習ラウンドを行う日本選手団

好成績を取めた東京2020オリンピックゴルフ競技。それを陰で支えたのはJGA強化チームの献身的なサポートだった。新型コロナウイルス感染拡大という前例のない事態の中で、どのように選手をウイルスから守り、パフォーマンスを引き出したのか。

## 独自の宿泊施設とルールを設けて「完全バブル化」を実現

日本ゴルフ界が初めて迎えた自国開催のオリンピック。日本代表選手に持てるパフォーマンスを発揮してもらうためにさまざまな環境を整えていくのがJGA強化チームの使命だった。

その中でも最も腐心したのは感染対策だった。

当初、日本代表選手は埼玉県内の組織委員会が承認したホテルに宿泊する予定だった。選手を外部と接触させない「バブル方式」と呼ばれる感染対策は講じられていたが事前の視察などで万全ではないと判断。万が一にでも選手が感染すれば、それはすなわち出場できなくなるということ。選手の感染リスクを徹底して排除するため独自の宿泊施設を会場近くに設ける決断を下した。

正式に決まったのは6月23日の強化委員会。開会式のちょうど1カ月前だった。

「強化委員会で“公式ホテルには泊まらず、我々独自の厳しいルールをつくって感染対策をしよう”とみなさん

に腹をくくっていただきました」と話すのは陣頭指揮を執ったJGA競技者育成強化本部内田愛次郎部長。開幕が迫った時期での方向転換だったが、すでにかねてからこうなることを想定して宿泊施設の目星はつけており、会場近隣で高齢者向けマンションの一部や一軒家など3カ所を押さえることができた。

会場まで10分ほどの高齢者向けマンションでは入居者と絶対に接触することがないよう導線を確保。ここではダイニングルーム内の共有スペースを本部として活用したほか、選手に提供する食事をつくるなど、拠点として重要な役割を果たした。また、このマンションの付帯施設であるジムも外部の人間と交わることなく使用できることになり、選手のコンディション維持に役立った。

選手団と接するスタッフらはワクチン接種済みの者に限定。さらに期間中は定期的にPCR検査を行い、万全を期した。宿泊施設と会場間はスタッフが車で輸送。会場以外で選手が一切外部の人間と接触しない「完全バブル」をつくり上げ、組織委員会の承諾もいただいた。

練習場所は霞ヶ関カンツリー倶楽部に隣接する東京ゴルフ倶楽部の協力を仰いだ。霞ヶ関カンツリー倶楽部は開会式翌日からでないと使用できないなどの制限があったため、選手が存分に練習できる環境を確保したのだ。ここでも一般プレーヤーと別の導線を設けるなどの感染対策を施し、組織委員会へ活動施設として登録した。



レジストレーション・IGFインフォメーションカウンター



クラブハウス入口にて、抗原検査を実施



凍らせたスポーツ飲料を摂取して体の内部から体温を下げる



アイスベストを着用する稲見(左)。オーストラリア代表も類似のアイテムを使用(右)



アイスバスに入って体温を下げる畑岡

## スポーツ科学を駆使した暑熱対策で選手のパフォーマンス維持を実現

パフォーマンス面のサポートも重要だった。

まずは暑熱対策。猛暑の中でもパフォーマンスを維持するため、数々のアイテムを導入したのだ。

そのひとつがアイスベスト。保冷材が入ったアイスベストを着ることで、炎天下でほてった体の表面の温度を下げるができるアイテムだ。プレー中は保冷材を十分に冷やすためスタッフがドライアイスが入ったクーラーボックスを持って帯同。必要なところで選手に冷えたアイスベストを着てもらった。

体の内部から体温を下げるために凍らせて摂取するスポーツ飲料も採用。体に蓄積された熱を放出するためにアイスバスも準備し、選手は宿舎に戻るとまずアイスバスに全身または足のみを浸して体温を下げ、体調維持に努めた。

食事にも気を配った。栄養サポートスタッフが各選手の好みと栄養バランスを考慮した献立をつくり、拠点で選手に提供した。

ゴルフが112年ぶりにオリンピックに復帰した前回のリオデジャネイロ大会では、日本は女子が野村敏京の4位タイ、男子は池田勇太の21位タイが最高成績だった。今回はそれを上回り、女子では稲見が銀メダルを獲得するなど自国開催の責任は果たしたといえるだろう。

サポートする側からすれば自国開催の利はあった。「ホームですからスタッフが十分に活動できましたし、ドライアイスなどの調達も容易にできたのは確かです」(内田部長)。

加えて、前回の経験も生かした周到な準備があったことは見逃せない。内田部長は「事前調査でどのようなアイテムが暑熱対策に効果的なのかを把握していました。五輪種目に復帰してから、JOCとJSC(スポーツ振興センター)との関係もより密になり、様々なスポーツ医学情報を得る環境になりました。そのような経緯もあり、今大会では、リオデジャネイロ大会の時より、他の五輪種目と同レベルのスポーツ科学を活用できたと思います」と証言する。

そして「コロナ禍と猛暑という厳しい状況の中でいかに選手にパフォーマンスを下げることなくプレーしてもらえるかというところに神経を使いました」と総括。選手のことを第一に考えたスタッフの献身的なサポートが日本代表の好成績を下支えしていた。